

368  
10



始



25 727

(第七回調査報告)

石炭に関する調査

名古屋商業會議所經濟調査部

コ-2249

た

368-10

# 石炭に關する調査目次

第一章	總論	一
第二章	需給狀況	三
第一節	供給	三
第一項	總觀	三
第二項	炭種別產出量	四
第三項	海外輸入	五
第二節	需要	六
第一項	總觀	六
第二項	內國消費狀況	七
第三項	海外輸出	一
第三章	伊勢灣勢力圏内及び名古屋市に於ける集散	一五
第一節	伊勢灣勢力圏内に於ける集散	一五
第一項	輸入	一五
第二項	輸出及び消費	一八
第二節	名古屋市に於ける集散	二一
第一項	輸入	二一
第二項	消費	二二
第三項	集散	二三
第四章	市價	二四
第一節	地元相場	二四

大正  
6. 9. 27  
内交

第一項 塊炭 . . . . . 二二

第二項 粉炭 . . . . . 二六

第二節 名古屋市に於ける市價 . . . . . 二七

第五章 市況の變遷及び市價昂騰の原因 . . . . . 二九

第一節 最近數年に於ける市況變遷の概要及び其の原因 . . . . . 二九

第二節 最近市價暴騰の原因 . . . . . 三二

第一項 需給の不權衡 . . . . . 三二

第二項 輸送の困難及び運賃の昂騰 . . . . . 三三

第六章 市價の將來と其の抑制策 . . . . . 三五

第一節 市價の將來 . . . . . 三五

第一項 需要方面よりの觀察 . . . . . 三五

第二項 供給方面よりの觀察 . . . . . 三六

第三項 運賃上よりの觀察 . . . . . 三七

第四項 結論 . . . . . 三八

第二節 市價昂騰抑制策 . . . . . 三八

石炭に關する調査目次終

石炭に關する調査

第一章 總論

一國に於ける石炭産出の豊否如何は、實に該國製造工業に至大の關係を及ぼすや、敢て贅言を要せざる所なりとす。見よ英國が今日世界工業國として雄を萬國に振ふ所以、又近時北米合衆國が其製造工業に於て長足の進歩を來たせし所以は、共に皆石炭の供給豊富なるに因るは正に其の原因と稱するを得べし。其他獨逸、埃太利、匈牙利、及び佛蘭西等に於ける製造工業が又等しく豊富なる石炭の供給に負ふ所あるは、蓋し掩ふべからざるの事實に屬せり。我國に於ける石炭の産出は叙上諸國に比し大に劣れるものありと雖も、而かも東洋に於ける石炭産出國として其の群を抜き、製造工業の發展上に資する所蓋し大なるものあり。今試に最近に於ける年産量千萬噸以上の世界重要石炭産出國を表示せば左の如し。

國名	明治四十四年	明治四十五年—大正元年	大正二年	大正三年
北米合衆國	四五五、七二〇、五五〇	五三四、四六六、五八〇	五一七、二八五、〇五〇	二七〇、〇七〇、四一四
英吉利	二七六、三三二、九六〇	二五七、一三六、〇〇〇	二九二、〇四七、五四四	一六一、五三三、二二四
獨逸	二三四、五二一、二五四	二五五、八一〇、〇九四	一九一、五一一、一五四	四一、四六〇、〇〇〇
埃太利 匈牙利	四九、八五九、六五五	五二、五二一、七七六	五四、一一二、二七二	四一、四六〇、〇〇〇
佛蘭西	三九、二二九、五九一	四一、三〇八、五八〇	四〇、〇五〇、八八八	三三、一三〇、〇〇〇
露西亞	二八、〇〇七、二三九	三〇、六四一、一六三	三二、二〇六、〇〇〇	三三、一三〇、〇〇〇
白耳義	二三、〇五三、五四〇	二二、九七二、七四〇	二二、八五八、〇〇〇	二二、八二二、二一〇
日本 朝鮮 香港 支那	一七、八八七、六三一	一九、九二〇、一六八	二二、六三一、八八八	九、二七二、〇〇〇
印度	一二、七一五、五三四	一三、〇〇〇、〇〇〇	一四、〇〇〇、〇〇〇	一六、四七八、一四二
支那	一三、〇〇〇、〇〇〇	一四、九五二、四四五	一四、九四六、九八五	一六、四七八、一四二
合計	一、一九二、〇八六、八四七	一、二九一、二八二、六八九	一、二四七、九六二、五〇〇	.....

(1) 即ち之を領土の廣狹及び人口の多寡より論せんか、我國に於ける石炭の産出量は、遙に英國に及ばざるのみならず、又我が四國と殆んど其の面積を等ふる白耳義に比し、大なる遜色あるは實に注目し値するものと云ふべし。歐洲戰亂の世界商品市場に與へたる影響は、蓋し大なるものありて、是等影響を蒙りたる諸商品中、石炭の如きは最も顯著なるものゝ一に屬す。開戦前に於ける世界の石炭産出量は年に據りて増減ありと雖も、逐年増加の趨勢にあらざるは單に

(2)

右表に據りても、之を知るを得べし。而して開戦後に於ける産出量の如何は、尙未だ完備せざるを以て、之が委曲を知る能はずと雖も、惟ふに英、獨、佛等の重要産出国が、其の壯丁を戦場に送りつゝあることの多數なるに思到せば、敢て増加の趨勢にあらざるは推知するに難からざるべし。然るに一面石炭を生命とする諸種工業は悉も底止する所なきのみならず、世界に於ける海運界の活躍等よりして、其の需要は増加するとも減退せざるは、之を諸種の統計資料に徴するも亦明かなりとす。

本邦に於ける石炭市場は、開戦前たる大正二年に於ては、前年の不振なりしに拘はらず活況を呈し、本邦炭は半世界的商品たりし觀を呈せしも、開戦當年なる大正三年に於ては、供給超過及び歐洲戦亂の突發の爲に、意外なる不振を蒙り、爲に九州炭の如きは出炭制限を實施するに至りしが如き現象を呈し、翌大正四年に至るも依然として市場の活氣乏しく、漸く年末に際し現戦亂に因る一般事業界の好況益々顯著なるに伴ひ、茲に市況は一轉して復活の曙光を認むるに至り、更に大正五年に入り前年來よりの事業界の旺盛は愈々益々其の度を増加し、唯に内地に於ける需要の旺盛なるのみならず、海外よりの需要も亦夥しく、茲に日本炭は再び半世界的商品となりしを以て、市價は昂騰し、殊に大正六年に至りては未曾有の暴騰を呈し、瓦斯事業の如きは勿論、一般製造工業に打撃を與ふること、實に深甚なるものあり。此の勢を以て推移せんか、幸に現戦亂の影響に因り海外に新市場を開拓し、爲に一大活躍を呈するに至りし我が製造工業をして、依然として今日の盛況を持續せしむる能はざるに至るやも亦圖り知るべからざると共に、一般國民生活に累を及ぼすもの蓋し鮮少なりとせず、須らく今に方り石炭需給の調節を圖り、其の市價の將來に對する研究を試みる所なかるべからず。

世界に於ける重要石炭産出国に於ける石炭産出量は、前表の如く我が國産出量に比し十數倍乃至二三十倍に達せるも、而かも是等諸國に於ける需要も亦我國に於ける比にあらざるを以て、其の餘剰の輸出も多からざるのみならず、地理的關係に於て本邦石炭産出量不足を補ふ能はざるの事情あり、隨て本邦に於ける輸入外國炭は、地理的有利なる支那に於ける開平撫順炭、及び佛領印度に於ける鴻基炭を主とし、其他英領印度、北米合衆國、濠洲等より多少の輸入あるに過ぎざるを以て、本邦石炭市場に現はるゝものは、主として本邦炭なるは云ふまでなし。今試に本邦炭の種類を列記せば大略左の如し。

- 一、九州炭
  - 三池炭—三池炭。
  - 筑豊炭—田川、伊田、木洞、山野、大ノ浦、滿ノ浦、大辻、芳雄、豆田、網分、峯地、太宰、神代、高松、高嶺、繁平田、平山、田川燐石、田川無煙の各炭。
  - 粕屋炭—姪ノ濱炭。
  - 唐津炭—岩屋炭。
- 二、本邦土炭—松島、松浦、福井炭。
- 三、北海道炭—夕張、幌内、空知、虻田、新夕張、登川、釧路の各炭。
- 四、臺灣炭—四脚亭、山仔脚炭。

以上の外朝鮮炭及び樺太炭の産出ありと雖も、何れも其の數量少なく、殊に樺太炭の如きは敢て茲に擧ぐるの價値なきものゝ如く、大體上我が國に於ける石炭は九州炭其の大部分を占むるを以て、該炭の趨勢を記述すれば、他は自ら推知するを得べし。

### 第一章 需給狀況

凡百の商品市價は一に需給關係に因りて決定さるゝは、毫も言を要せざる所なるを以て、今石炭市價の暴騰せし所以を窮め、其の將來に備ふるに際しても、亦須らく過去に遡りて需給の關係を調査し、之を現在に於ける狀況に照し、以て將來を洞察すると共に、併せて各種附帶現象を觀察する所なかるべからず。之れ研究の順序として本章に於て需給關係を叙せんと欲する所以なり。

#### ○第一節 供給

今次石炭市價暴騰に關し、石炭の需給關係を觀察するには、明治四十五年—大正元年以降を以て足れるが如しと雖も、供給に於ては特に明治三十九年以降大正五年末に至る十一ヶ年間の各年産出高及び輸入高を觀るに左の如し。(農商務省統計に據る、但し大正五年産出量は概算なり)

年次	産出高	前年に比し 増加産出高	輸入高	前年に比し 増加輸入高	合計	前年に比し 増加高
明治三十九年	三、九〇、二〇〇	—	三、八〇、〇〇〇	—	三、九〇、二〇〇	—
同 四十年	三、八〇、〇〇〇	—	三、八〇、〇〇〇	—	三、八〇、〇〇〇	—
同 四十一年	四、八〇、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇	三、八〇、〇〇〇	—	四、八〇、〇〇〇	一、〇〇、〇〇〇
同 四十二年	一五、〇〇、〇〇〇	一〇、二〇、〇〇〇	二五、〇〇、〇〇〇	八、二〇、〇〇〇	一五、〇〇、〇〇〇	一〇、二〇、〇〇〇

(3)

(4)

同	四十三年	一五六、三三〇	一、五三、三二一	一七四、六一一	一、八八、六六五	一、五八、八七四
同	四十四年	一七六、三三〇	一、五三、三六六	一八、八三四	一、八二、五二〇	一、五八、八七四
同	四十五年—大正元年	一九六、九七五	一、〇〇七、〇四三	二〇八、三三九	一、九四、八〇〇	一、五八、八七四
大	正二年	二二、三三、九三三	一、六六、二〇七	五五、七三三	二、八八、四四二	一、五八、八七四
同	三年	三三、五三、四四九	九七、七三三	九七、七三三	三、九三、九三三	一、五八、八七四
同	四年	二〇、四〇、七三三	一、八三、六六六	六九、九三三	三、〇七、九三三	一、五八、八七四
同	五年	三三、〇〇、〇〇〇	一、五九、二五三	五五、九三三	三、〇七、九三三	一、五八、八七四

本表に據れば、産出高に於ては大正四年を除くの外は各年何れも増加し、其量多きは二百萬七千餘噸(前年に比し一割一分強)、少なきも二十二萬二千餘噸(二分五厘強)に達せり、殊に明治四十四年以後に於ける増加は、同年以前に比し一般に大なりとす。輸入高に於ては明治四十年、大正四年及び同五年を除けば、他は何れも増加し、其量多きは三十八萬餘噸(六割六分強)、少なきも一萬二千餘噸(六割五分強)に達し、結局産出及び輸入高合計即ち供給總高に於ては、大正四年を除くの外は、他は各年何れも増加し、其量多きは二百十三萬二千餘噸(二分強)、少なきも三十萬七千餘噸(二分強)に達せり。而して輸入高の増加は産出高の増加と稍々其歩調を等ふし、明治四十五年—大正元年以降に於て大なる増加を來たしたる結果、供給總高に於ては、大正四年を除外せんか、明治四十四年乃至大正元年以降に於て、著しく増加するに至れり。即ち我國に於ける石炭界の状況は、明治四十四年乃至大正元年に於て一新期に侵入せしものと觀るを得べし、之れ果して獨り需要増加にのみ基因せしものなるか、乞ふ次節に於ける需要の状況に就て之が詳細を窺へ。

### 第二項 炭種別産出量

本邦に於ける石炭産出量の大勢は前項の如くなるが、今更に各年産出高を各炭種別に分類するときは、九州炭大部分を占め、其の割合實に内地産出高の七割乃至七割六分にして、殘餘の二割四分乃至三割は概算上本土炭及び北海道炭の折半する所に係れり。殖民地炭は其の數量少なく内地炭に對し僅に二厘弱乃至三厘強の割合にして、臺灣炭其の大部分を占めり。乞ふ左表に據りて其の詳細を窺ふべし。

炭種	明治四十四年—大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年
九州炭	一、三三七	一、五一二	一、五二五	一、三五一	一、五一四
筑豊炭	八六七	九五五	九四七	八六二	九〇三
製鐵所炭	四〇	四三	四九	四八	五六
船屋郡炭	四六	四五	五三	六六	八四

(5)

三池炭	一八〇	一九〇	一七五	一四五	一六一
竹島炭	三〇	三三	三五	四〇	五二
唐津炭	一〇一	一〇六	一〇五	九九	一一四
肥前炭	一一四	一三〇	一五三	一四三	一三五
天草炭	九	一〇	八	八	九
本土炭	二六五	二六一	二七二	二六九	三三三
常盤炭	一八三	一九八	二〇一	二〇四	二一三
本山炭	七三	五三	六〇	五四	八七
紀州炭其他	九	一〇	一一	一一	一三
北海道炭	一八九	二〇六	二五〇	二三五	二六八
北炭	一八九	二〇六	二五〇	二三五	二六八
夕張及新夕張其他	一八九	二〇六	二五〇	二三五	二六八
合計	一、八四一	一、九七九	二、〇四七	一、八五五	二、〇九五
殖民地炭	三五	五一	四五	五三	六五
臺灣炭	二三	三七	二九	三一	三九
朝鮮炭	一一	一三	一五	一一	一二
總計	一、八七六	二、〇三〇	二、〇九二	一、九〇八	二、一六〇

### 第三項 海外輸入

本邦に於ける海外諸國よりの輸入炭は、主として支那及び關東州を第一とし、之に亞げるは佛領印度及び英吉利にして、其他英領印度、北米合衆國、濠洲及び其他の諸國より輸入なきにあらずと雖も、其の數量極めて少量なるのみならず、各年連續的の輸入なし。支那及び關東州よりの輸入量は實に本邦總輸入量中の大部分を占むと雖も、開戦後に於ては戦前と逆勢を保ち漸次減少の傾向あり、即ち本邦總輸入量に對し明治四十四年に於ては八割七分強、明治四十五年—大正元年に於ては九割三分強に九割三分弱、翌大正二年に於ては更に増加して九割六分弱となり、漸増の趨勢を呈せしも、大正三年に至ては九割三分強に減じ、翌大正四年に於ては更に減じて八割強、大正五年に於ては又も減じて七割六分強に下れり。然るに之に反し佛領印度よりの輸入は、明治四十四年以降に於ては大正五年を除き、漸増の趨勢を保ち、就中開戦後に於て著しとす。即ち總輸入量に對し明治四十四年に於ては僅に一分二厘に過ぎざりしも、明治四十五年—大正元年に於ては二分二厘、大正二年に於ては二分九厘、大正三年に於ては五分一厘に進み、更に大正四年に於ては一躍一割七分四厘に激増するに至りたれども、大正五

(6)

年に至つては激減して二分二厘に下り、開戦前の輸入量と大差なきに至れり。英吉利よりの輸入は明治四十四年に於ては七分八厘、明治四十五年―大正元年に於ては五分二厘、大正二年に於ては減じて一分五厘、大正三年に於ては一分二厘、大正四年に於ては稍々増加して二分に上りしも、大正五年に至ては全然輸入なし。其他英領印度及び香港よりは開戦後に於て始めて輸入を見、前者は大正四年より、後者は大正五年に於て之れあるに至れり。北米合衆國よりの輸入は開戦後殆んど之れなく、開戦前なる大正二年に於ても亦之を見ず。此の如く輸入状況の變遷あるに至りたる所以のものは、元より炭界に於ける諸種の事情に基因せりと雖も、而かも其の根底に於て現歐洲戦亂に因る諸種製造工業の勃興、及び海運界の變遷あるを閉却すべからず。乞ふ更に左表に據りて最近六ヶ年に於ける石炭輸入状況を窺ふべし。

Table showing coal import statistics from 1911 to 1920, categorized by country (e.g., 支那, 東州, 英領印度, 佛領印度, 英吉利, 北米合衆國, 濠太刺利, 其他諸國) and including columns for quantity and value.

第一節 需 要

Table titled '第一項 總 觀' showing supply and demand statistics for 1919 and 1920, including '供給高と相對照して需要状況を觀察せんが爲め' and '前年比し'.

即ち内國消費高は明治四十一年及び同四十二年の兩年を除くの外は、各年何れも増加し、其量多きは三百五十七萬七千餘噸、少なきも四萬餘噸を算へ、殊に明治四十四年以降に於て著しきものあり。外國輸出高に於ては明治三十九年以降に於て増減相半ばし、明治四十一年以降同四十三年の三ヶ年及び大正三、四の兩年は何れも前年より減少し、是等兩減少期中明治四十三年及び大正四年に於ける減少高(前者は七萬四千餘噸、後者は六十八萬五千餘噸)の著しきに注目するの要あり。明治四十四年以降大正二年に至る三ヶ年間は、各年増進の勢を呈するも、明治四十年に於ける増加輸出高なる五十二萬八千餘噸に及ばず、而して一面輸入高増加の著しきこと前節の如くなるより觀察せんか、内地に於ける需要の旺盛なりしことを證するに足るべし。斯くして内國消費高及び外國輸出高の合計高なる所謂需要總高に於ては、明治四十一年及び同四十二年の兩年、並に大正四年を除けば、他は各年何れも増加し、其量多きは三百七十五萬九千餘噸、少なきも三十八萬八千餘噸に及び、殊に明治四十四年以降に於ける需要の著しきは正に供給高の増加と相照應し、本邦石炭界に於ける需給の増進を示せるものあるを知ると同時に、大正四年に於ける輸出減少は、同年に於ける輸入高の減少に對する調節となりたるの觀を呈するも、結局需給何れも前者より減少したるは注目し値する所にして、之れ蓋し需要の不振と、前年に於ける九州炭の出炭制限に基因する現象に外ならざるべし。

第二項 内國消費狀況

一、各用途別消費 内國消費高は前表に示すが如く、明治四十一年及び同四十二年に於て各々前年より減少したる外、他の各年は其の大小こそあれ、總じて各年増加の趨勢なり。然れば更に一步を進め、用途別に於ける消費の大勢を知るにあらざれば、未だ以て需要増進に對する趨勢を知悉したるものと云ふ能はざるべし。即ち之を各用途別に分類するときは左表の如し。

(7)





莫小業	一三、一三六・五三四	石鹼及蠟燭製造業	二八、九六四・一〇〇
麻真田	二八九・八〇〇	染織類材料等製造業	一〇、四二二・五〇〇
計(其他共)	一五、二四〇・三三四	人造肥料製造業	九五、五〇六・二六四
雜業	七、〇七七・九〇八	雜業	五一、五六三・六一七
合計	二、九五〇・九二八・二四八	合計(其他共)	二、一七一・六八二・二九五
機械及器具工業	一四二、三四三・四三九	飲食物工業	
機械製造業		釀造業	七八、三二二・九一一
船舶車輛製造業	一五八、一九九・五一二	清濁白酒味濃燒酎等	四六、八六八・〇七〇
船舶	二一八、三九八・一六二	麥	二〇〇、四一七・二六一
計(其他共)	二二八、一〇〇・八九五	計(其他共)	一九〇、一八七・二二二
器具製造業	二〇〇、七九三・一九六	製糖業	五、二六〇・一〇三
金屬品製造業	七八九、六三五・六九二	製茶業	一一六、六六四・七一
合計		精穀製粉業	九三、一七五・〇〇三
化學工業		ラムネ、礦泉業	三九、六三九・七一八
窯業	五九、三三三・六七六	菓子製造業	四、一五六・三六五
陶磁器及七寶	一九五、〇六一・三五〇	罐詰、瓶詰業	一、二一七・二二〇
硝子製品及玻璃器	六一二、一五七・二二六	畜產品製造業	八四、六八四・四九八
セメント、石灰、燄炭	一二三、四一〇・八五二	水產品製造業	一一、八四六・二三〇
煉瓦、瓦、土管、埴塼、レトルト	九八九、九六三・一〇四	雜業	七四七、二四八・二二一
計	五三七、八二七・四五七	合計	
製紙業	四三〇・五〇〇	雜工業	
漆器業	一七、六二九・九六九	印刷製本業	九、〇〇〇・九三三
製革、及毛皮精製業	一四、五五六・五六八	紙製品業	八三一・二〇〇
發火物製造業	三二、二二二・五九八	木、竹、藁、葉、製品業	三〇、五七七・五五〇
寸	七一、一四四・七二三	皮革製品業	三、一一〇・〇〇〇
計(其他共)	二四三、九八四・一四六	羽毛製品業	一、九九五・四〇〇
製油及製蠟業	九二、〇〇〇・八九七	鹽表、葉産、花産業	一四七・七〇〇
製藥業	三二、四〇〇	玉石牙骨介甲角製造業	二〇〇・〇〇〇
護謄製造業		雜業	八、九七六・三二七
化粧品製造業		製綱製鋼	

被服及裁縫品

朝子	一、四一〇・四五〇	特別工業	
木管、綜絃、箏、バツキンヲ	八、四八七・五三七	電氣業	五二六、三五二・〇四六
鼻緒、雪駄、笠、爪革、小間物其他	三九、五六七・二五五	瓦新業	六四八、一七九・八四八
計(其他共)	二〇、一三八・八五七	金屬精煉業	一一二、九四八・二二九
合計	八四、五〇八・六二九	合計	一、二八七、四八一・〇二〇
合計	一三〇、一九一・四〇九	總計	八、〇七七、一六六・八八五

を不し、一般的の概念を與ふるに止めんとす。(左表中各業別消費量に北海道を除く、同道の分は「所屬工業不明」の數に併算す)

△(□)大正五年 大正五年に於ける各種工業石炭消費量は、尙ほ未だ確實なる統計の完了せざるを以て、左に概算上の數字

染織工業	四七四、二〇〇	飲食物工業	一九六、二〇〇
紡織業	一、三七六、〇〇〇	製糖及び製粉業	二〇七、三〇〇
機械工業	二八五、〇〇〇	製氷業	九二、〇〇〇
造船及び鐵工業		雜工業	一、四八六、八〇〇
化學工業	一、四〇五、九〇〇	特別工業	
窯業	三一一、四〇〇	電氣業	四〇一、七〇〇
陶磁器及び硝子器	二八〇、一〇〇	瓦新業	五五六、二〇〇
セメント	二八九、五〇〇	金屬精煉業	六六七、五〇〇
煉瓦、土管類	五二四、九〇〇	所屬工業不明	一、三八七、八一〇
コーラ、ガス	三二七、七〇〇	計	九、四四三、八一〇
製紙業	五一、七〇〇		
肥料、製藥及び製油			

本表は前記の如く概算なるを以て、大正四年に於けるが如く各細別工業を網羅せざるの結果、互に相對照比較する能はざるの憾みあるも、各種工業總消費量に對する各細別工業消費量の割合は、大體上大差なくして、化學工業及び染織業に於て殆んど半額を占め、殘餘は特別工業及び其他の工業の占むる所となれり。

第三項 海外輸出

本邦炭の海外輸出は地理的關係上、東洋諸國其の大部分を占め、北米若くは歐洲諸國へ輸出せらるるもの多からず。更に

東洋諸國へ對する輸出に於ては支那其の大部分を占めり。即ち各年總輸出量に對し輸出量の割合大なるものより順次に擧ぐれば、支那を第一とし、香港之に亞ぎ、以下海峽殖民地、蘭領印度、比律賓諸島、露西亞、北米合衆國等相順次し、其他露、佛、獨、墨、濠洲等あれども、其の輸出數量大ならざるのみならず、概して各年連續的の輸出なし。今更に之を總輸出量に對する比率上より觀察せんか、支那、關東州及び香港に對する輸出は、實に各年に於ける本邦總輸出量の過半を占め、多きは七割(明治四十四年)、少なきも五割八分弱(大正四年)に當り、多くは六割一厘乃至六割四厘を占め、此の内支那のみに就て觀れば、三割九分弱(明治四十四年)乃至三割三分強(大正三年)を占め、多くは三割四厘弱乃至三割七厘強を往來せり。支那、關東州及び香港を除く他の諸國へ對する輸出量は、總輸出量の約半ばに當り、此の内海峽殖民地は一割七分(大正四年)乃至一割二分強(明治四十四年)、蘭領印度は七分五厘(大正四年)乃至二厘強(明治四十四年)、比律賓諸島は一割二分強(大正五年)乃至七分八厘(明治四十四年)、露西亞は三分三厘弱(大正四年)乃至一分六厘(大正二年)、北米合衆國は四分一厘弱(大正三年)乃至四厘(大正四、五年)を占め、殘餘は其の他の諸國の占むる所なり。

更に進んで他の方面即ち單に各年に於ける輸出數量より觀察せんに、支那に對する輸出は明治四十四年以後漸増の趨勢を有せしも、大正三年に至りて稍々減少し、大正四年に於て更に一段の減少を來たし、大正五年に於ては稍々増進せしも、開戦前に及ばず。香港に對する輸出は大正二年迄は漸増なりしも、大正三年に於て稍々減少し、大正四年及び同五年に於ては開戦前に比し激減せり。英領海峽植民地に對する輸出も亦略ぼ同勢を保ち、戦前までは漸増なりしに反し、開戦後に於ては漸減に變じ、蘭領印度に對しては大正五年を除くの外は、各年漸増の趨勢を持し、比律賓諸島に對しては戦前は漸増の趨勢を有せしこと、支那其他の諸國と同様なるも、開戦後に於ては大正四年に於て減少せしも、大正五年に於ては増加して殆んど大正二年と等しき數量を示したるに於て異なれり。露西亞に對しては大正元年は前年より減少し、大正三年に於ては却て前年より増加し、大正四年に於ては激増せしも、大正五年に於ては激減せり。北米合衆國に對しても亦大勢に左右され、開戦後著しく減少するに至れり。英吉利に對しては開戦後殆んど輸出なく、獨逸及び埃太利匈牙利に至ては更に之れなきは勿論にして、白耳義、露西亞、丁抹、墨西哥等の諸國に對しても亦開戦後に至り輸出なく、之に反し、佛蘭西、南米諸國、亞弗利加等に對しては大正五年に至り輸出を見、濠洲に對しては大正四年に輸出なかりしも、大正五年に於ては戦前に於て許て見ざる輸出量を示し、布哇に對しては開戦後著しく輸出増進するに至れり。蓋し斯の如く本邦石炭輸出上の變遷あるに至りたるは元より本邦斯界の狀況に基因すると雖も、又以て是等の輸出國に於ける斯界の狀況を觀るを得べきと同時に、開戦後に於ける變遷の主として現戦亂に基因せるを思はざるべからず。

左に明治四十四年以降最近六ヶ年間の輸出數量、及び價額を表示し一眸裡に叙上の趨勢を觀るの資に供せん。

國名	種類	明治四十四年		大正二年		大正三年		大正四年		大正五年	
		數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
支那	塊炭	1,743,351	79,443,311	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711
	粉炭	1,178,111	53,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111
合計		2,921,462	132,474,422	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822
關東州	塊炭	1,143,351	79,443,311	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711
	粉炭	1,178,111	53,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111
合計		2,321,462	132,474,422	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822
香港	塊炭	1,143,351	79,443,311	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711
	粉炭	1,178,111	53,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111
合計		2,321,462	132,474,422	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822
英領印度	塊炭	1,143,351	79,443,311	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711
	粉炭	1,178,111	53,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111
合計		2,321,462	132,474,422	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822
英領海峽殖民地	塊炭	1,143,351	79,443,311	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711
	粉炭	1,178,111	53,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111
合計		2,321,462	132,474,422	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822
蘭領印度	塊炭	1,143,351	79,443,311	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711
	粉炭	1,178,111	53,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111
合計		2,321,462	132,474,422	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822
佛領印度	塊炭	1,143,351	79,443,311	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711
	粉炭	1,178,111	53,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111
合計		2,321,462	132,474,422	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822
露西亞	塊炭	1,143,351	79,443,311	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711
	粉炭	1,178,111	53,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111
合計		2,321,462	132,474,422	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822
亞細亞	塊炭	1,143,351	79,443,311	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711	1,433,511	61,616,211	1,773,381	75,147,711
	粉炭	1,178,111	53,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111	1,200,111	54,031,111
合計		2,321,462	132,474,422	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822	2,633,622	115,647,322	2,973,492	129,178,822

比律賓	諸島	暹羅	英吉利	佛蘭西	獨逸	白耳義	奧地利	露西亞	丁抹	北米	加拿陀	墨西哥	南米諸國	埃及	其他亞非利加諸國
塊炭	粉炭	塊炭	粉炭	塊炭	塊炭	塊炭	塊炭	塊炭	塊炭	粉炭	塊炭	塊炭	塊炭	塊炭	塊炭
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

濠太刺利	布哇	其他諸國	合計
塊炭	塊炭	塊炭	塊炭
...	...	...	...

第三章 伊勢灣勢力圏内及び名古屋市に於ける集散

第一節 伊勢灣勢力圏内に於ける集散

本邦に於ける石炭の需給は前章に叙説したるが如し。今や進んで名古屋市に於ける石炭の集散を調査せんと欲す。顧ふに石炭は其の品種の關係に於て、元來船舶貨物たるの性質を帯ぶるを以て、主として海運輸送に據り、而して海運輸送に於ては本市は正に伊勢灣諸港との關係密接にして、其の影響は直接間接本市に及ぼすものあるの結果、本市に於ける石炭集散を明かにせんと欲せば、勢ひ先づ伊勢灣に於ける夫れを考察する所なかるべからず。

第一項 輸入

伊勢灣に於ける石炭輸入港は、主として名古屋、武豊或は半田、及び四日市の諸港とす。今三井物産株式會社名古屋支店石炭部の調査に據れば、明治四十年以降に於ける輸入量左の如し。

年次	數量	年次	數量
明治四十年	五〇六、六六一	明治四十二年	五二一、〇三〇
同 四十一年	五一一、七二四	同 四十三年	五五五、五一〇



炭及び開平炭等の輸入あり。即ち撫順炭は大正元年に於て五萬七千噸、大正二年に於て六萬八千三百五十噸、大正三年に於て八萬六千三百三十四噸、大正四年に於て四萬百三十八噸、大正五年に於て七萬七百七十九噸を算し、本溪湖炭は大正三年に於て一萬千六百三十三噸、開平炭は同年に於て三萬五千四百三十五噸の各輸入あり。

第二項 輸出及び消費

海運利用上に於ける伊勢灣勢力圏内は愛知縣、三重縣、岐阜縣、及び静岡縣内西遠地方に及ぶを以て、今是等地方に對する大正五年に於ける石炭散布を觀るに、愛知縣に對し六十三萬九千六十噸、三重縣に對し十五萬九千三百噸、岐阜縣に對し十萬八千八十噸、及び静岡縣西遠地方に對し四萬千二百二十噸、合計九十四萬七千五百六十噸を算せり。即ち同年に於ける伊勢灣輸入高九十七萬九千五百噸に對し、愛知縣六割五分八厘弱、三重縣一割六分四厘弱、岐阜縣一割一分一厘強、静岡縣西遠地方四分二厘強を占めり。其他の各年に對する數量は精確なる調査を缺くと雖も、大略叙上の標準と觀察するも大過なからんか。

鑛て是等各地方に於ける各業種別に據る最近兩ヶ年の消費を觀るに、概觀上愛知縣に於ては鐵道を第一とし、製絲、紡績、陶器、瓦斯等之に亞ぎ、何れも一ヶ年の消費量五萬噸以上を算し、以下三萬噸以上に於ては織物及び湯屋あるのみにして、其他は何れも三萬噸に達せず、其の内消費量の大なるものより擧ぐれば鹽業、セメント、散炭、電氣、釀造、製糖、鐵工、硝子、製氷、製油、豆粕、排水、製紙等にして其他は三萬噸に達せず。三重縣に於ては紡績を第一とし、電氣及び製絲之に亞ぎ、何れも一萬五千噸を算し、其他は何れも一萬噸に達せず。此の内織物、セメント、瓦斯、及び湯屋を主要なるものとし何れも三萬噸以上を算せり。岐阜縣に於ては陶器を第一とし、石灰及び製絲之に亞ぎ、何れも一萬噸以上を算し、以下五千噸以上の製紙及び織物、三千噸以上の瓦斯を主要なるものとす。静岡縣西遠地方に於ては製絲を第一として約一萬噸を往來し、之に亞げるは捺染にして六千噸以上を算し、以下織物、湯屋、及び製茶の約三千噸以上を主要とし、其他は何れも消費量多からず。乞ふ左表に據りて消費の一般的狀況を察すべし。

Table with 6 columns: 業種年次, 愛知縣 (數量, 割合), 三重縣 (數量, 割合), 岐阜縣 (數量, 割合), 静岡縣西遠地方 (數量, 割合), 合計 (數量, 割合). Rows include 紡績, 鐵道, 織物, 製絲, 捺染, セメント, 瓦斯, 電氣, 製氷, 散炭, 鹽業, 排水, 硝子, 製油, 豆粕, 製紙, 陶器, 製絲, 織物, 製絲, 織物.

Table with 6 columns: 業種年次, 愛知縣 (數量, 割合), 三重縣 (數量, 割合), 岐阜縣 (數量, 割合), 静岡縣西遠地方 (數量, 割合), 合計 (數量, 割合). Rows include 陶器, 製絲, 織物, 捺染, セメント, 瓦斯, 電氣, 製氷, 散炭, 鹽業, 排水, 硝子, 製油, 豆粕, 製紙, 陶器, 製絲, 織物, 捺染, セメント, 瓦斯, 電氣, 製氷, 散炭, 鹽業, 排水, 硝子, 製油, 豆粕, 製紙.

品名	大正四年	大正五年	大正四年	大正五年	大正四年	大正五年	大正四年	大正五年	大正四年	大正五年	大正四年	大正五年	大正四年	大正五年	大正四年	大正五年	大正四年	大正五年	大正四年	大正五年
鐵工	7,650	5,900	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
製油	3,183	5,000	1,817	1,817	1,817	1,817	1,817	1,817	1,817	1,817	1,817	1,817	1,817	1,817	1,817	1,817	1,817	1,817	1,817	1,817
釀造	1,540	3,200	2,060	2,060	2,060	2,060	2,060	2,060	2,060	2,060	2,060	2,060	2,060	2,060	2,060	2,060	2,060	2,060	2,060	2,060
石灰	1,000	1,100	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000
湯屋	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000
製粉	10,300	7,700	1,600	1,600	1,600	1,600	1,600	1,600	1,600	1,600	1,600	1,600	1,600	1,600	1,600	1,600	1,600	1,600	1,600	1,600
豆粕	3,750	4,500	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
製茶	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
煉瓦、瓦	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
土管	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
官廳	3,500	3,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000
雜種	1,630	4,700	4,600	4,600	4,600	4,600	4,600	4,600	4,600	4,600	4,600	4,600	4,600	4,600	4,600	4,600	4,600	4,600	4,600	4,600
合計	6,671	5,976	12,677	12,677	12,677	12,677	12,677	12,677	12,677	12,677	12,677	12,677	12,677	12,677	12,677	12,677	12,677	12,677	12,677	12,677

〔備考〕 大正四年の数字は最高消費量を算出せしものなるを以て、精確なる意味を以て純消費量と見る能はず、大正五年の数字は實際消費量なり。故に業種に據りては大正四年の数字の大なるものあるに注意すべきなり。

### 第二節 名古屋市に於ける集散

#### 第一項 輸入

名古屋市に於ける石炭の輸入は前節第一項に據り、略ぼ之を知るを得べしと雖も、更に連年の数字を示せば左表の如し。

年次	数量	明治四十年に對する増加率
明治四十年	九,八九八	100
大正元年	三〇七,三七六	二〇・六
同 二年	四六五,九七九	三六・七
大正三年	五四一,七七九	四四・二
同 四年	四四五,七五二	三五・二
同 五年	六三二,二七五	五三・三

即ち明治四十年を基準とせば、大正元年は二十割六分、大正五年は五十三割三分の各増加に當り、實に驚くべき消費の増進を示し、更に大正元年を基準とするも尙ほ且つ大正五年に於ては十割六分弱の増進を示し、如何に本市に於ける石炭使用工業が長足の進展を現はせるかの證左を見るべきなり。而して其の輸入炭種は前記の如く本邦炭を主とするは勿論にして、外國炭としては開平、撫順炭、及び鴻基炭、南領印度の輸入あるに過ぎずして、本邦輸入の外國炭に比し、種類に於ても、將又數量に於ても、何れも少なきは、蓋し自然の數なるべし。

#### 第二項 消費

竊て名古屋市に於ける最近石炭消費の状況を數量上より觀るに、大正元年に於ては前年に比し七割四分強の増加に當り、近年に於ける最大量を示せしが、翌大正二年に於ては二割一分弱を減せしも、爾後漸増の趨勢を示せり。即ち大正三年は二分四厘強、大正四年は七分強の増進に當れり。更に其の用途別に就て觀るに、工場用を第一とし、船舶用之に亞げり。但し大正元年以前に於ては發電用は工場用に次げる最少量を示せしも、同年以後其の使用殆んど之なきに至れり。之れ消費總量に於て前記の如く大正二年に於て激減するに至らしめしものと觀るも、大過なきに庶幾からんか。乞ふ更に左表に據りて其の詳細を窺へ。(市統計に據る)

用途別	明治四十四年	明治四十七年—五十年	大正二年	大正三年	大正四年
工場用	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000
船舶用	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000
發電用	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000
其他	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000	数量 1,000 金額 1,000

即ち工場用石炭は總消費量に對し、明治四十四年に於て五割一分強、大正元年に於て八割二分強、大正二年に於て九割一分強、大正三年に於て八割八分強、大正四年に於て七割九分強に當り、即ち事實に於て本市石炭消費の消長は、一に製造工業の消長如何に因りて決せらるゝが如きの實狀を呈し、其他の用途は從たる地位にありと雖も、海運の漸次隆盛に赴くに伴ひ、船舶用石炭の消費漸増せるを觀るべし。

大正五年に於ける用途別石炭消費量の正確なる統計は、尙ほ未だ之を得る能はずと雖も、今三井物産株式會社名古屋支店石炭部の調査によれば、概略左の如くにして、之に據り併せて工場用石炭に對する各業別消費の一般的狀況を觀察する所あるべし。

業種	數量	業種	數量	業種	數量
染織工業	一八、〇〇〇	煉瓦、瓦、土管	一七、二〇〇	瓦新業	五二、八〇〇
製絲業	六七、六〇〇	製紙業	六〇、九〇〇	雜業	六七、七〇〇
紡績業	二二、〇〇〇	製油業	一、九〇〇	雜屋	二五、八〇〇
織物業	三六〇	豆粕業	一、九〇〇	雜計	三七、五〇〇
漆染業	一〇八、九六〇	合計	六七、五〇〇	鐵道院	六三、三〇〇
鐵工業	五、七〇〇	飲食物工業	六、一〇〇	鐵道院	七五、〇〇〇
鐵工及諸機械	五、七〇〇	醸造業	五、四〇〇	官廳	七五、〇〇〇
合計	五、七〇〇	製糖業	三、八〇〇	陸軍	一〇、五〇〇
化學工業	二二、九〇〇	製氷業	一五、三〇〇	其他	一〇、六〇〇
窯業	三、六〇〇	特別工業	一四、九〇〇	合計	二一、一〇〇
陶器	七、九〇〇	電氣業	一四、九〇〇	總計	四二四、五六〇
硝子器					
セメント					

本表を市統計に於ける大正四年の消費量と比較する時は、二倍半以上の多量に上り、其の差異の甚しきを認め得るのみならず、船舶用の如きは本表中に之を認むるを得ず、試に之を市統計の形式に據り大別するときは、工場用は二十六萬五千六百噸、其他は十五萬九千四百噸となり、工場用のみに就て觀るも二倍以上に達せり。大正五年に於ける石炭消費量は現戰

亂の好影響に因り、各種製造工業の旺盛を告ぐるに至りたるの事實を考量するも、果して斯の如き石炭消費の増進ありたるか、記して以て他日の研究に譲らん。

### 第三項 集 散

名古屋市に於ける石炭の輸入及び其の消費は、前兩項に於て記載せしが如く、輸入は明治四十年を除くの外大體上消費に超過し、其の超過量は之を近接又は近縣地方へ輸出せられしものと觀るを得べし。即ち其の超過量を示さば左の如し。

年次	超過量	年次	超過量
明治四十年	一七、二〇八	大正三年	三八六、一二三
明治四十五年—大正元年	一〇二、八〇五	大正四年	二七九、一五九
大正二年	三二四、〇三九	大正五年	二〇七、七一五(?)

即ち明治四十年に於ける石炭輸入高は、其の消費高を補ふに足らざりしも、爾後輸入高増進して餘裕を生じ、更に之を他へ輸出するに至りたるは、石炭市場に對する本市の地位を進めたるものと觀るを得べし。而して大正三年に於ける石炭消費高は、其の前年より増加せるに拘はらず、其の超過量が前年に比し増加せるは、大正三年に於ける輸入高が其の前後兩年に比し増加せるに主因せり。更に前後九ヶ年間に於て本市に於ける石炭集散の狀況が、如何に變遷せるかを窺はんが爲め、左に明治四十年及び大正四年に於ける名古屋市に對する石炭集散地方統計を示さん。

地方別	明治四十年		大正四年	
	輸出	輸入	輸出	輸入
神戶	二六	一、二三六	二四、六一一	一四、六一一
尾張	七	七	七、〇〇五	七、〇〇五
三河	七	四二	三二、一七六	三二、一七六
伊勢			一、二二五	一、二二五
志摩			五	一、六七三
紀伊				
近江	七			
美濃			五、一二六	五、一二六
九州	九九〇	九三、六九〇	三二九、三二四	三二九、三二四
北海道		四、九二三	六五、三〇三	六五、三〇三
合計	九九〇	九三、六九〇	三二九、三二四	三二九、三二四



大連	13,750
旅順	3,335
營口	1,936
秦皇島	13,000
鴻基	6,574
其他	857
合計	100,928

即ち本市に於ける石炭輸入は主として九州よりし、之に次ぐは北海道とす。明治四十年に於ては九州よりの輸入高は實に九割四分弱を占め、北海道よりの輸入は僅に四分弱に過ぎずして、殘餘の二分強は伊勢灣内に於ける諸港よりの輸入に係りしが、大正四年に至りては九州及び北海道以外、本州に於ては紀伊よりの輸入を見、更に海外なる關東州及び佛領印度等の外國炭の輸入あるに至れり。即ち同年に於ける九州よりの輸入は、總輸入高に對し七割四分弱、北海道よりの輸入は一割五分弱、海外よりの輸入は一割一分弱に當り、著しく輸入先(仕出地)の範圍を擴張せり。翻て輸出の状態を観るに、明治四十年に於ては僅に尾張、三河、及び美濃に對する輸出ありしのみにて、其の内美濃に對する輸出を主とし、總輸出高の九割六分強を占しが、降りて大正四年に於ては其の輸出先の範圍を著しく擴め、叙上三地方以外更に伊勢、志摩、及び紀伊を加ふるに至れり。而して是等地方に對する輸出は伊勢を主とし、總輸出高に對する二割弱を占め、次は尾張に對する一割五分強にして、以下三河に對する四分三厘弱、志摩に對する七厘弱等とし、其他の地方に對しては合計五割七分強に達せり、以て是等兩年に於ける輸出入關係の著しき變遷を観るに足らん。

### 第四章 市價

本邦に於ける石炭需給の狀況は、叙上の如く一進一退、頗る波瀾曲折に富みしを以て、其の市價に及ぼせし影響も亦、其の間一高一低、頻繁なる變動を免れざりしが爲め、最近に於ける本邦石炭市場は頗る異變を呈し、之を大正元年以前に比せんか、其の變遷の著しきは、既説の一端を以てするも、之を窺知するを得べし。今左に最近數年に於ける市價騰落の一般を記し、以て其の趨勢を明かにせんとす。

#### 第一節 地元相場

各地に於ける石炭價格は、地元に於ける價格に、各地に至る運賃及び諸掛費を計上せるものなるを以て、炭價の一般的價

格を知らんと欲せば、炭坑地に於ける價格を調査せば可なり。而して本邦炭は叙上の如く九州系其の大部分を占むるを以て該炭の價格を知らば、本邦炭價の大勢を窺ふを得べく、而して更に塊炭の炭況如何は、實に炭價高下の先驅をなすを以て、先づ塊炭價格を示し、而して後粉炭價格に及ぼさんとす。

#### 第一項 塊炭

近年の塊炭價格を示さんが爲め、筑豊一等塊炭を撰び、其の明治四十五年以降の變動を表示せば大略左の如し。(單位一噸)

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
明治四十五年	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00
大正二年	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00
大正三年	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00	7.00
大正四年	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00
大正五年	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00
大正六年	10.00	10.00	10.00	11.00	11.00	11.00	11.00	11.00	11.00	11.00	11.00	11.00

即ち明治四十五年一月に於ける五圓は、爾後今日に至る炭價の最低をなし、夏季に於ては通常低落すべき趨勢も、同年の夏季に於ては大なる低落なく、却て昇騰すべき状態にある冬季に於て稍々低落するに至れり。大正二年に於ては需要旺盛にして、好況を呈せしかば、前年に比し著しく昇騰し、前年と比較し各月概して一割六七分、殊に十二月の如きは三割一分強の昇騰を示し、大正三年に入るも依然として其の趨勢を持續し、同年二月に於ては七圓貳拾錢に進み、明治四十五年一月に比し實に四割四分の昇騰となり、正に大正五年上半期以前に於ける最高價格を示せしも、爾後稍々下落に傾き、同年下半期に入りては歐洲戰亂勃發の影響を受け、一昂一低の商狀の下に春季に於ける最高價格を如き高値を見ず、殊に十二月に於ては著しく下落し、歐洲戰亂勃發當時なる七月に比すれば、四分三厘強、八月に比すれば一割一分強の低落に當れり。大正四年に入りては更に一層の低落に傾き、殊に下半期に於て著しく、十一月を以て年初に比すれば實に一割八分強の低落となりしも、翌大正五年に至りては其の形勢を一變し、年初より漸騰の勢を持し、六月に於ては一月に比し二割一分強の昇騰に當り、下半期殊に初冬の頃よりは一層昇騰し、十二月に於ては六月に比し二割一分強、一月に比し四割六分強、前年同期に比すれば實に四割九分強の暴騰を示し、近年に於ける炭價に新記録を與へしが、其の昇進趨勢は之に止まらずして、益々其の度を加へ、大正六年に入るや、年初一月に於ては前年末の七圓九拾錢に對し、一躍拾圓五拾錢に奔騰して、實に三割三分強の昇進率を示し、爾後昇騰に次ぐに昇騰を以てし、四月に於ては遂に拾壹圓に進み、一月に比して更に四分七厘強の高値を示し、明治

四十五年一月に於ける最低価格に比較せば、實に十二割の暴騰となれり。即ち大正五年晚秋又は初冬頃以降に於ける炭價暴騰の急激にして、且つ其の頻繁なるは、本邦炭界史中未曾有の現象に屬し、此の勢を以て進まんか、前途昂騰の勢は殆んど端視する能はざるものあり。

第二項 粉 炭

續て粉炭の價格如何と云ふに、價格高低の差異こそあれ、其の一般的騰落の趨勢は元より塊炭の夫れと異ならざるは、蓋し自然の數と稱すべし。即ち明治四十五年一月以降に於ける筑豊一等粉炭の價格(船乘直段)を表示せば左の如し。(單位一噸)

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
明治四十五年	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇
大正二年	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇
大正三年	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇
大正四年	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇
大正五年	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇
大正六年	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇

即ち粉炭に於ても亦明治四十五年一月の價格を以て、同月以降最近に至る數年間の最低相場を示し、同年中は漸騰の勢を以て夏季に至るも低落するに至らず、同年十二月に於ては一月に比し一割四分弱の昂騰を示せり。大正二年に於ても亦前年同様の歩調にて漸騰の商狀を示し、同一月は前年末に比し稍々上騰し、前年同期に比し一割五分強の昂騰に當れり。斯くして十一月に於ては同年中の最高を示し、一月に比し四割三分弱、前年同期に比し實に四割八分強の昂騰を示せり。大正三年に於ては年初は前年末同様の價格を維持せしも、夏季に至るに伴ひ漸落し、秋季に至り稍々回復せしも、再び下落に傾き十二月に於ては同年中の最低價を示し、最高なる一月及び前年同期の價格に比し一割五分強の下落に當れり。大正四年に於ては更に一層の下落に傾き、盛夏及び秋季に至り益々甚しく、大正元年に於ける同期と略ぼ同様の價格に下り、最低なる九月の價格は一月に比し一割七分弱、前年同期に比し二割八分強、明治四十五年一月に比し四分強の下落にて、實に開戦後に於ける最低價を示せり。大正五年に至りては其の形勢を一變し、大體上年初より漸騰を示し、夏季に至るも更に下落を呈せず、初秋よりは市場俄に草まり、昂騰の勢著しく十二月に至ては前月の六圓七拾錢より一躍八圓、即ち一割九分強の昂騰を示し一月に比すれば七割八分強、前年同期に比すれば實に九割五分の暴騰に當れり。大正六年に入るも依然として其の趨勢を持續し、年初より昂騰に次ぐて昂騰を以てし、四月に入りては八圓六拾錢に昂進し、一月に比し四分弱、前年同期に比し五層

六分強、明治四十五年一月に比せば實に十三割六分弱の暴騰に當れり、又以て最近に於ける炭價暴騰の異數なるを知るに足らん。

第二節 名古屋市に於ける市價

續て名古屋市に於ける價格如何と云ふに、大體上前節炭坑地價格に本市迄の運賃を加へたる額なりとす。即ち筑豊一等粉炭を標準とする名古屋港着相場を表示せば左の如し。

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
明治四十五年	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五
大正二年	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五
大正三年	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五
大正四年	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五
大正五年	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五
大正六年	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五	四四五

上表價格は前記の如く名古屋港着を標準とせるを以て、市内相場に於ては更に之に船内人足賃、船賃、水上賃、口錢、倉入賃及び缺斤等に對する所要失費一噸に就き凡そ壹圓五拾五錢を加ふるを要すれども、今上表の着値段に就て之を觀るに、其の騰落の一般的趨勢は元より前節地元相場と異ならざるも、進んで其割合を觀るに實に左の如し。(筑豊一等粉炭を標準とす)

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
明治四十五年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
大正二年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
大正三年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
大正四年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
大正五年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
大正六年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

本表に據りて之を觀るときは、名古屋港着相場の最近五ヶ年有餘間に於ける各期間騰落の割合は、大正三年までは常に地元相場より低位にありたりと雖も、大正四年以降に於ては概して上位にあるを示し、彼我狀況の相異なるに至りしを認むべし。而して叙上の趨勢は元より市内相場に於ても亦同様ならざるを得ず。今試に市内一當業者の發表せる市價平均を示せば

左の如し。(市内相場は大體上一萬斤單位を商習慣とせるを以て、之に據れり。)

品 種	月 次	明治三十五年					大正二年					大正三年					大正四年					大正五年					大正六年				
		一	二	三	四	五	一	二	三	四	五	一	二	三	四	五	一	二	三	四	五	一	二	三	四	五	一	二	三	四	五
九州塊炭(中)	平均	四二、一七	四二、六七	四五、八三	四六、三三	四六、八三	四九、〇〇	四九、三三	五一、三三	四九、〇〇	四八、八五	四八、七〇	四七、六七	四七、三三	四九、六七	五一、三三	四八、〇〇	五一、五〇	五一、〇〇	四九、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	四七、五〇	四六、八三	四六、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	五〇、〇七	五〇、八三	五三、六七	五五、〇〇
	一月	四二、一七	四二、六七	四五、八三	四六、三三	四六、八三	四九、〇〇	四九、三三	五一、三三	四九、〇〇	四八、八五	四八、七〇	四七、六七	四七、三三	四九、六七	五一、三三	四八、〇〇	五一、五〇	五一、〇〇	四九、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	四七、五〇	四六、八三	四六、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	五〇、〇七	五〇、八三	五三、六七	五五、〇〇
	二月	四二、一七	四二、六七	四五、八三	四六、三三	四六、八三	四九、〇〇	四九、三三	五一、三三	四九、〇〇	四八、八五	四八、七〇	四七、六七	四七、三三	四九、六七	五一、三三	四八、〇〇	五一、五〇	五一、〇〇	四九、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	四七、五〇	四六、八三	四六、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	五〇、〇七	五〇、八三	五三、六七	五五、〇〇
	三月	四二、一七	四二、六七	四五、八三	四六、三三	四六、八三	四九、〇〇	四九、三三	五一、三三	四九、〇〇	四八、八五	四八、七〇	四七、六七	四七、三三	四九、六七	五一、三三	四八、〇〇	五一、五〇	五一、〇〇	四九、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	四七、五〇	四六、八三	四六、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	五〇、〇七	五〇、八三	五三、六七	五五、〇〇
	四月	四二、一七	四二、六七	四五、八三	四六、三三	四六、八三	四九、〇〇	四九、三三	五一、三三	四九、〇〇	四八、八五	四八、七〇	四七、六七	四七、三三	四九、六七	五一、三三	四八、〇〇	五一、五〇	五一、〇〇	四九、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	四七、五〇	四六、八三	四六、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	五〇、〇七	五〇、八三	五三、六七	五五、〇〇
	五月	四二、一七	四二、六七	四五、八三	四六、三三	四六、八三	四九、〇〇	四九、三三	五一、三三	四九、〇〇	四八、八五	四八、七〇	四七、六七	四七、三三	四九、六七	五一、三三	四八、〇〇	五一、五〇	五一、〇〇	四九、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	四七、五〇	四六、八三	四六、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	五〇、〇七	五〇、八三	五三、六七	五五、〇〇
	六月	四二、一七	四二、六七	四五、八三	四六、三三	四六、八三	四九、〇〇	四九、三三	五一、三三	四九、〇〇	四八、八五	四八、七〇	四七、六七	四七、三三	四九、六七	五一、三三	四八、〇〇	五一、五〇	五一、〇〇	四九、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	四七、五〇	四六、八三	四六、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	五〇、〇七	五〇、八三	五三、六七	五五、〇〇
	七月	四二、一七	四二、六七	四五、八三	四六、三三	四六、八三	四九、〇〇	四九、三三	五一、三三	四九、〇〇	四八、八五	四八、七〇	四七、六七	四七、三三	四九、六七	五一、三三	四八、〇〇	五一、五〇	五一、〇〇	四九、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	四七、五〇	四六、八三	四六、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	五〇、〇七	五〇、八三	五三、六七	五五、〇〇
	八月	四二、一七	四二、六七	四五、八三	四六、三三	四六、八三	四九、〇〇	四九、三三	五一、三三	四九、〇〇	四八、八五	四八、七〇	四七、六七	四七、三三	四九、六七	五一、三三	四八、〇〇	五一、五〇	五一、〇〇	四九、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	四七、五〇	四六、八三	四六、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	五〇、〇七	五〇、八三	五三、六七	五五、〇〇
	九月	四二、一七	四二、六七	四五、八三	四六、三三	四六、八三	四九、〇〇	四九、三三	五一、三三	四九、〇〇	四八、八五	四八、七〇	四七、六七	四七、三三	四九、六七	五一、三三	四八、〇〇	五一、五〇	五一、〇〇	四九、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	四七、五〇	四六、八三	四六、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	五〇、〇七	五〇、八三	五三、六七	五五、〇〇
	十月	四二、一七	四二、六七	四五、八三	四六、三三	四六、八三	四九、〇〇	四九、三三	五一、三三	四九、〇〇	四八、八五	四八、七〇	四七、六七	四七、三三	四九、六七	五一、三三	四八、〇〇	五一、五〇	五一、〇〇	四九、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	四七、五〇	四六、八三	四六、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	五〇、〇七	五〇、八三	五三、六七	五五、〇〇
	十一月	四二、一七	四二、六七	四五、八三	四六、三三	四六、八三	四九、〇〇	四九、三三	五一、三三	四九、〇〇	四八、八五	四八、七〇	四七、六七	四七、三三	四九、六七	五一、三三	四八、〇〇	五一、五〇	五一、〇〇	四九、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	四七、五〇	四六、八三	四六、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	五〇、〇七	五〇、八三	五三、六七	五五、〇〇
十二月	四二、一七	四二、六七	四五、八三	四六、三三	四六、八三	四九、〇〇	四九、三三	五一、三三	四九、〇〇	四八、八五	四八、七〇	四七、六七	四七、三三	四九、六七	五一、三三	四八、〇〇	五一、五〇	五一、〇〇	四九、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	四七、五〇	四六、八三	四六、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	五〇、〇七	五〇、八三	五三、六七	五五、〇〇	
平均	四二、一七	四二、六七	四五、八三	四六、三三	四六、八三	四九、〇〇	四九、三三	五一、三三	四九、〇〇	四八、八五	四八、七〇	四七、六七	四七、三三	四九、六七	五一、三三	四八、〇〇	五一、五〇	五一、〇〇	四九、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	四七、五〇	四六、八三	四六、〇〇	四八、〇〇	四七、三三	五〇、〇七	五〇、八三	五三、六七	五五、〇〇	
九州粉炭(中)	平均	三二、八三	三三、六七	三六、一七	三七、一七	三七、五〇	三七、五〇	三八、一七	三八、一七	四一、六七	四一、六七	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三	四三、三三

即ち塊炭及び粉炭何れも大正三年開戦勃發當時までは、各前年より騰貴せしも、同年開戦後は大體上前年より下落し、大正四年に於ても依然低落の趨勢を保ち、同五年に入ると共に其の形勢を一變し昂騰の勢を示し、大體上明治四十五年以降に於て未だ見ざる高値を現はし、月の進むと共に益々著しく、年末及び大正六年初頭に於ては俄然奔騰を示し、之を明治四十五年と比較せば、塊炭は二倍以上、粉炭は二倍二三分の高値となるに至りたり。但し以上は大體上平均相場なるを以て上等炭或は最高價格に就て其の比較を求めば、前記以上の暴騰なるに注目すべし。

### 第五章 市況の變遷及び市價昂騰の原因

叙上の如く一時不況に沈淪せし我が石炭市場は、現戦亂の影響を蒙りて異數なる活躍を呈し、就中大正五年秋季以降に於ける市價暴騰は實に未曾有の現象なりとす。蓋し斯の如き現象を呈するに至りたる所以ものは、素より諸原因の伏在し、且つ前年來より誘致し來りたる諸現象に因由したるや勿論なるを以て、昨秋以降に於ける市價暴騰に對する原因を剔抉せんと欲せば、先づ以て該期以前に於ける斯界の變遷を顧みざるべからず。即ち斯界の一變轉期を呈せしを観ある明治四十五年—大正元年以降該期に至る變遷及び其の原因を叙し、而して後最近の夫れに及ばんとす。

#### 第一節 最近數年に於ける市況變遷の概要及び其の原因

第二章需給狀況に於ける統計の示すが如く、明治四十五年—大正元年に於ける石炭産出は前年より増加し、又輸入高も著しく増進したるに拘はらず、内外に於ける需要之に伴はず、殊に海外輸出の如きは稍々増加したりと云ふのみにて、大なる差あるを見ざるの結果、所謂供給超過となり、全國積出港に於ける貯炭は百三十萬噸内外を算するの不況なりしが、下半年に入り内地工業の旺盛を告ぐるに伴ひ、稍々愁眉を開くに至りたりと雖も、塊炭の如きは依然として市場を見出すに至らざりき。然るに大正二年に至りては、唯に内地消費高の増進せしのみならず、海外に於ける需要は(イ)英國炭坑々夫の同盟罷工、(ロ)印度炭貨車不足に因る積出の不圓滑、及び(ハ)濠洲及び英領コロピンヤ等に於ける坑夫の同盟罷工に因り、著しく増進して數年に於けるレコードを破り、之が爲に本邦炭は四十有餘萬噸の新販路を開拓し、爲に本邦に於ける貯炭は激減し、甚だしきに至ては僅に三十萬噸を算するに過ぎざるに至れり。然れば本邦炭は從來其の勢力範圍とせし新嘉坡を超へて、遠く南洋、印度洋に向ひ、東はホルム、及び北米西岸に達し、本邦炭は茲に半世界的商品となれるの觀を呈するに至れり。然れば此の如き急激なる需要に伴はしむべく、坑主及び當業者は斯業に關係ある鐵道及び船舶業者との交渉を遂げ、其の一致協力の下に、各坑の出炭増加、及び新炭の開掘、並に輸送設備の改良及び擴張を計劃し、以て盛に供給増加を計るに至れり、

之れ即ち前年に比し市價騰貴し、又供給高の増進せし所以なりとす。  
 然るに大正三年に於ては、前年來の活況に因り市價昂騰の勢を示し、一見市況の活躍を想像せしめしと雖も、前年に於ける夏季相場の下落せざりしに反し、本年に於ては一般常習的傾向に倣ひて下落するに至りし等、前年と其の趣を異にし、早晩一變轉機の出現もやと憂へたりしに、果せる哉同年七月に於ける現歐洲戰亂の勃發に因り、商工業に一大打撃を與へて茲に炭況崩潰の因を開けり。加之前年來よりの供給増加計畫に伴ふ鐵道院の大輸送計畫は著々事實に現はれ、三月以降に於ける出炭及び貯炭は著しく増加せしのみならず、鐵道院に於ける開平炭の購入等の爲め、供給は増加せるに拘はらず、需要は戰亂影響に基く内地製造工業の不振のみならず、海運界の變調に因り外國船の出廻りも亦少なかりしが爲め著しく減少し、茲に炭況は全然崩潰し、前年來に於ける好況は、斯くして瞬時にして消失せしかば、之が善後策として出炭の制限となり、五月初旬に於て筑豊炭田一割、年末更に一割、前後を通じて二割の出炭制限を實施し、以て需給の調節を圖るに至れり。之れ同年現戰亂勃發後に於ける市價が漸次下落の傾向を示せし所以にして、此の傾向は大正四年に入るも依然として持續せしのみならず、益々其の度を加へて市價は一層下落に傾き、需給調節に因る出炭制限一市價恢復策も何等の効を奏せず、夏季に至り炭況の不振は實に絶頂に達し、大正元年に於ける同期に比し更に不況を呈せしが、爾後現戰亂の影響に基く一般事業界の活況益々顯著なるに伴ひ、一方季節關係と相俟つて年末に際しては、各港積出の増進、貯炭の漸減を示すに至り、茲に市況は再轉して漸く復活の曙光を認むるに至れり。

果せる哉、大正五年に至りては現戰亂の影響に因る諸種事業界の振興愈々著しく、就中製造工業界は未曾有の活躍を呈するに至りしが故に、石炭の需要は俄然非常なる勢を以て増進し、積出港に於ける貯炭は減少して、甚しきは時に七十二萬噸内外に激減し、茲に炭界は復活して向上的趨勢を採り、市價は昂騰に次ぐに昂騰を以てし、三四月の交よりは前數年になき高値を現はし、殊に同年秋季よりは市況俄に革まり、以て最近に於ける一變轉機を構成せり。其の奔騰の趨勢は大正六年に入り愈々益々激烈となり、奈邊まで進行するに至るや、殆んど端睨する能はざるの感あらしむ。實に斯の如き市價暴騰は、一般製造工業に一大打撃を與へ、此の勢を以て進まんか、幸に現戰亂の好影響に因り、一大好況を呈せる斯界を驅つて萎微不振の状態に陥らしむるやも亦た圖り難し。炭價調節策の聲漸く喧傳するに至る、豈に所以なしとせんや。蓋し大正五年に於て此の如き現象を呈せし所以のものは、前記内地製造工業の旺盛を呈せし以外、更に内、海運界に於ける活躍に伴ふ需給の増進及び、外、海外輸出の増加に基因せり。即ち海運界に於ては内國船の燃料は、漸次新船の増加に伴ひ相應に増加せるのみならず、外國船に於ては開戰當時全く東洋方面に跡を絶ちたりと雖も、爾後戰局の變移に伴ひ加奈陀太平洋洋線其他の舊航路の復活、又は新航路の増設等に因り、是等船舶の燃料は戰前に復せざるまでも、少なくとも開戰後萎微減少せるの時期

に比せば著しく其の數量を増加せり。加之是等船舶の燃料は内外の別なく總べて上等塊炭を要求するに至りたるを以て、一層市價昂騰の因を強ふせり。聽て海外輸出の増進如何と云ふに、前年より其の範圍を著しく擴大し、西は印度洋、蘇西、及び紅海より進んで英吉利に及び、南は南洋より濠洲に及び、東はホルム、より北米及び南米諸國に達し、而して北は露西亞への輸出益々激しく、爰に日本炭は再び半世界的商品たるの域に進み、運賃の昂騰を意とせず多量の塊炭を需要するに至れり。蓋し斯の如きは(イ)英國、濠洲、印度及び米國諸炭の輸出減少又は不可能、(ロ)撫順炭の不活動等に基因するものと觀るを得べし。

需要の増進斯の如くなるに、退ひて供給方面如何を顧みれば、勿論斯の如き熾盛なる需要に伴ふべくもあらず、茲に於て(イ)消極的には出炭制限の撤回となり、五月一日一割、十月一割即ち大正三年に於ける制限を全然解除し、更に(ロ)積極的には新坑の開掘に努めたるも、上等炭田には勿論自ら限りありて、殆んど奏効するに至らず、之を以て既掘炭坑に於ける採炭量の増加を極力試みたりと雖も、是れ亦殆んど其の目的を達するに至らず。

大正六年に入るも依然として製造工業方面を始め、鐵道、船舶、其他の需要熾盛にして、前年に比し更に五分乃至一割の需要増進なるべきは蓋し明かなるべく、海外よりの需要は、英國、濠洲、印度、米國諸炭の輸出激減又は皆無なるが爲め、本邦炭の輸出は増進せるも、聽て供給は産出及び海外輸入共前年同様依然として増加の見込なく、需給の權衡を失すること蓋し大なるものあり。最近數年に於ける我が炭界變遷の顯著なること以て觀るべきなり。

### 第一節 最近市價暴騰の原因

最近數年に於ける我が炭界の變遷に伴ふ市價昂騰の原因は、前節叙説せし所を以て大略之を窺知し得べきを以て、更に進んで一變轉機を實現せし昨年秋季以降に於ける市價暴騰の原因を一層詳細に考究せんとするに際し、之を概括して其の大綱を示さんか、實に左の三項に歸するを得べし。

- 一、需要の増進
- 二、供給不足―出炭増加の困難
- 三、輸送の困難及び運賃の昂騰

### 第一項 需給の不權衡

前記第一項及び第二項は更に簡約して需給の不圓滑と觀るを得べし。即ち第二章需給狀況に於ける統計を引用して、其の大勢を觀るに、大正三年に於ける産出高及び海外輸入高は前年より著しく増加し、爲めに出炭制限の實施あるに至りしと雖

も、翌四年は之に左右されて兩者とも激減せるを以て、供給總高に於ては前年に比し二百十五萬餘噸(九分強)を減少せり。然るに此の間内地に於ける製造工業は現戦亂の影響を蒙り、駸々乎として發展し、爲に内地消費高は産出高の減少と相反し、四萬餘噸(二分強)を増加するに至り、假令一面輸出高は六十八萬五千餘噸(二分強)を減少し、結局需要總高に於ては六十四萬五千餘噸(三分強)を減少したるも、供給總高の減少より小にして、其の割合三に對する一に過ぎざるを以て、同年に於ける需給の權衡は全く破られたるが故に、茲に市價昂騰の因を發するに至れり。大正五年に於ける産出は、前年に比し約百六十萬噸(七分六厘)を増加せしも、大正三年の産出高に達せず、輸入高に於ては前年に比し約六萬噸(九分五厘)を減じ、實に大正三年に於ける輸入高の五割七分強に過ぎざりしが故に、供給總高に於ては前年に比し僅に百五十餘萬噸(七分強)の増加に止まれるも、他面需要に就て之を觀るに、内地消費高のみに於ても前年に比し三百五十六萬餘噸(二分強)を増加せるに、更に輸出高に於て約二十萬噸(六分九厘強)を増加せしを以て、需要總高に於ては三百七十五萬九千餘噸(二分強)の増加となり、實に明治四十年以來に於ける最多量を示し、大正三年に比し約三倍半の巨額なりとす。即ち大正五年に於ける需要の増進は前九ヶ年間に於て未だ曾て見ざるの盛況を呈し、供給總高の増加率七分強に對しては實に二倍七分強を示し、前年に於ける需給兩方面の減少せし形勢に對し、實に甚だしき懸隔ありと稱すべし。大正五年秋季以降に於ける市價の暴騰蓋し所以なしとせざるなり。

斯の如き需要増進に對し、供給不足なるの主因は、内地に於ける供給計畫即ち産出高増加が、前記の如く奏効する能はざるが爲にして、之が原因は蓋し労働關係及び採掘設備上の關係を主とし、他は運輸設備を從とするものゝ如し。即ち坑夫を増加し大に其の産出量を増加せんと欲するも、(イ)前年來に於ける労働者の離散は容易に回復する能はざるのみならず、(ロ)他面諸工業及び金屬鑛山より坑夫を奪はるゝことの盛なる等の爲に、意のまゝに坑夫の増加を圖る能はず。又(ハ)出炭増加設備に於ても諸材料の騰貴と其の不足の爲め、之れ亦容易に實現する能はず。假令一步を譲り是等の諸設備充實するとするも、(ニ)貨車及び船腹不足のため配送力を増加する能はざるのみならず、(ホ)運賃昂騰の爲め自然積出意の如くなる能はざるの事情あり。

今試に明治四十一年以降に於ける従業坑夫及び其の工數即ち労働關係の大勢を觀るに、大正三年までは坑夫數及び工數は總べて各年増加せりと雖も、大正四年に至りては坑夫數は前年より増加せるも、工數は却て減少し、以て前年來に於ける狀況に對し變化を與へ、採掘能力の減退を示せり。大正五年に於ける労働狀態が如何なる成績を挙げたるか、未だ其の詳細を知る能はずと雖も、之を過去の統計的趨勢に徴するも、大正三年以前に於ける労働需給の調節が大體に於て圓滑に行はれたるものも、同年以後に於ては其の形勢を一變して、需給上不圓滑を呈しつゝあるは、叙上に依りても之を推知し得べし。乞

ふ左表に據りて更に之を窺ふべし。

年次	六月末現在坑夫數	工數	年次	六月末現在坑夫數	工數
明治四十一年	一二六、九九九	三四、〇六八、八四八	大正元年	一五二、四二九	三八、六八二、〇九二
明治四十二年	一五二、五一五	三二、七六〇、五〇六	大正二年	一七二、四四六	四〇、三五六、九五九
明治四十三年	一三七、四六七	三三、七一一、九七六	大正三年	一八二、六三七	四四、一〇六、九九二
明治四十四年	一四五、四二二	三六、一〇六、一二七	大正四年	一九三、一四二	四二、三八六、八九七

需要に對する供給叙上の如くなるを以て、各積出港に於ける貯炭も亦大正五年下半年以降著しく減少し、最近數年に見ざる少量を示し、炭價昂騰を助成しつゝあるに似たり。今試に明治四十五年—大正元年以降最近に至る若松、門司兩港に於ける貯炭量を示し、如何に最近に於て減少したるかの證左を示せば左の如し。

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大正二年	一五	一六	一四	一六	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五
大正三年	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六
大正四年	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六
大正五年	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六
大正六年	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六

即ち大正二年に市況活躍し輸出盛なりしを以て、貯炭は大正五年以前五ヶ年間に於ける最少量を示し、甚だしきは七月に於ける十三萬四千噸に下りしが、大正五年四月頃より二十七萬餘噸即ち三十萬噸以下に下り、大正元年八月頃に於けると略ぼ同量を保ち、以後大體上漸減の趨勢を保ち大正六年二月に至りては激減して十六萬五千噸に下り、翌三月に於ては再び下りて實に十四萬噸に減じ、大正二年七月に次げる最少量となり、之を最近數年に於て最多量なりし大正四年三月の八十一萬四千噸に比較せば、實に驚くべき激減と稱せざるべからず、以て大正六年に入りてよりの需要の一層熾盛なるに至りしを窺ひ得ると同時に、市價暴騰の同月頃より益々激しきに至りしを首肯し得べし。

第二項 輸送の困難及び運賃の昂騰

最近石炭市價暴騰に對する原因の一面は叙上の如く、需要増進に伴ふ供給不足なりと雖も、他面之を凌駕する原因は、實に輸送の困難及び運賃の昂騰なりとす。即ち開戦以來に於ける製造工業の旺盛に伴ふ出貨の激増は、實に異數なる現象にして、殊に最近に於て然りとするを以て、輸送機關の不足は戦局の進むと共に愈々激しく、陸には貨車の増發なきを啣ち、海

には船腹の不足に苦しむの状態、愈々益々深刻となれるを以て、輸送の困難は年と共に激烈となれり。船腹の不足は既に世間周知の事に屬し、茲に贅言を要せざるを以て、今試に鐵道輸送状態の大勢を示さんが爲め、筑豊、唐津方面に於ける一日平均輸送噸數を表示せば左の如し。

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大正二年	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇
大正三年	二六,五〇〇	二六,五〇〇	二六,五〇〇	二六,五〇〇	二六,五〇〇	二六,五〇〇	二六,五〇〇	二六,五〇〇	二六,五〇〇	二六,五〇〇	二六,五〇〇	二六,五〇〇
大正四年	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇
大正五年	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇
大正六年	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇	二五,〇〇〇

即ち最多量なる四月を標準とせば、大正四年は大正二年に比し七分弱、最少量なる八月を標準とせば、大正五年は最低運賃と比較せば來たせり。而して大正五年以降に於ける數字は之を缺くと雖も、大勢上一層の減少を來たせるは蓋し明かなりと云ふべし。更に各年平均に據る一日平均の輸送噸數を求むれば左の如し。

年次	數量
大正二年	二七,〇〇〇
大正三年	二八,五〇〇
大正四年	二五,〇〇〇
大正五年	二五,五〇〇
大正六年	二五,三〇〇

斯の如き状態なるを以て、海陸共運賃は開戦後昂騰の趨勢を持し、最近に至りては殊に著しきものあるに至れり。今試に明治四十五年以降最近に至る若松及び門司より名古屋港に至る海運運賃の變動を表示せば概ね左の如し。(單位一噸)

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大正二年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
大正三年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
大正四年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
大正五年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
大正六年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

即ち最近に於ける海運運賃は、之を大正元年と比較せば、實に四倍半内外の昂騰となり、大正三年の最低運賃と比較せば實に約十一倍の暴騰となり、大正四年の同期(五月)に對しては三倍弱の昂騰にして、更に大正五年の夫れと比較するも尙且つ一倍八分の昂騰となれり。大體上開戦後の運賃は漸次昂騰の趨勢を持せりと雖も、大正五年に入るや元より一高一低を免れざりしも、大勢上益々昂騰の度を高め、殊に秋季頃よりは暴騰を告ぐるに至れり。之れ同季より炭界市況革まり、爾後昂騰に次ぐに昂騰を以てし、殆んど其の底止する所を知らざるに至りたる所以にして、最近炭價暴騰上運賃暴騰に因由するの大なる以て察すべきなり。

最近に於ける炭價暴騰の凄じきこと、上來叙説したるが如しとせば、將來に於ける市價の趨勢如何は、實に一般製造工業家は勿論、商業家に對しても亦重大なる影響を及ぼすは自明の理なるを以て、須らく今に方り市價の將來を洞察して之に備ふる所なかるべからず、即ち市價の將來にして依然昂騰を持続するに於ては、之に對する抑制策を講究するは眞に當業者の喫緊問題と稱せざるべからず。乞ふ左に節を分ちて論究せんと欲す。

### 第六章 市價の將來と其の抑制策

#### 第一節 市價の將來

今次の炭價暴騰は大正二年に於ける市況活躍とは、大に其の趣を異にせり。即ち大正二年に於ける市況活躍は、内地製造工業に於ける著しき需要の増進なく、主として海外市場に於ける一時的需給の變調に基因せしを以て、其の恢復と共に忽ち斯界をして不況に陥らしめしと雖も、今次の炭價暴騰は主として内地需要の増加及び海運界の變調に基因し、加ふるに海外の刺戟を蒙りたる、所謂内外相呼應せるの結果なるを以て、斯の如き現象に變調を來たさざる以上は、市況に對して急激的變調を生せしめざるものと觀るも大過なからん。即ち問題は叙上現象に對する變動の運速如何に係るものなるを以て、左に各方面よりして之を考究せんとす。

#### 第一項 需要方面よりの觀察

最近石炭需要の増進は一に内地製造工業の旺盛と、海外輸出の増加と共に基因し、而して是等兩現象は一に現戦亂の影響に基因せるを以て、現戦亂の終熄せざる限りは、是等兩現象に對し未だ俄に變異あるべしとも思はれず、況んや海外需要の増進に因る輸出の増加は、主として濠洲炭及び印度炭の出廻不足なるに基因し、現戦亂の終熄せざる限りは、之れ亦繼續すべきものと見るも大過なきに似たるに於ておや。即ち現戦亂の繼續せる限りに於ては海外諸國殊に東洋南洋諸國に對する歐貨供給の激減は依然として繼續され、其の結果本邦品に對する需要は之れ亦依然として熾盛なるべきを以て、内地製造工業の旺盛は、海外市場の變異あらざる限りは毫も減殺さるべくならず、隨つて石炭需要は益々旺盛なるべきの道理なり。假令戰爭にして豫想より迅速に終熄すべしとするも、海外市場の狀況は戰爭終熄と同時に舊態に復すべくもあらざるのみならず、

内地製造工業も亦之が爲に急速なる變化あるべくもあらず。交戦國の戦前状態に恢復するまでには相當年月の経過を要し、此の間戦時に於て發展したる我が諸工業は漸次其の基礎を鞏固にするに至るべきのみならず、其の自然的に勃興し、又は基礎の鞏固なるものは、今後益々發展すべきを以て、一部世人の唱道するが如く、戦後直に反動的に我が諸工業の不振を來すべしとも思惟されざるを以て、彼の大正二年に於ける炭界活況の反動を直に翌年に於て觀たるが如きは、蓋し實現すべくもあらず。

### 第二項 供給方面よりの觀察

大正元年以降に於ける石炭の供給を觀るに、大正二年に於ては前年の供給不足に應ずる爲め、極力出炭増加を計畫したる結果、前年に比し八分五厘強の増加をなし、大正三年に於ては已に供給超過となりたるが爲め、出炭制限の實施となりしも尙且つ前年に比し四分六厘の増加をなしたり。然るに大正四年に至りては、其の反動を蒙りて八分餘の減少を呈し、更に大正五年に於ては需要増進の爲め、銳意出炭増加を試みたるも、七分六厘の増加に過ぎず。而かも大正五年に於ける此の如き増加も前章絮説の如く需要の増進に及ばず、況んや大正六年に入りては供給不足の聲益々高く、加之海外よりの輸入は三年以來逐年減少せる等の傾向に徴せんか、現戦亂依然として繼續し、海外に於ける我が市場に何等變化なく、内地製造工業に於ける石炭の需要亦現今の如くなるに於ては、今後に於ける石炭の供給は依然不足を告げ、需給の權衡は到底保つべくもあらず。假に本年に於ける需給の關係を昨大正五年と同一と見做すも、著しき供給不足に終るべし。即ち昨年以前に於ける需要の増加は既記の如く内國消費高のみに於ける二割二分弱、海外輸入合計需要高に於ける一割九分強に對し、供給は産出高に於ける七分六厘、輸入高合計供給高に於ける七分強に止まるを以て、實に甚しき需給の懸隔を生ずべし。而して斯の如き供給不足に對する出炭増加は、既記の如く(イ)炭坑の老朽と新炭田の缺乏、(ロ)坑夫の離散及び他工業よりの招替、(ハ)材料の騰貴及び其の不足、(ニ)輸送力の不足等に因りて、到底實現すべくもあらず、假令多少の増加ありとするも、そは下等なる雜炭に止まるべく、而して斯の如き雜炭は、現今に於ける需要が主として上等塊炭若くば上等粉炭にある以上は、市價昂騰の大勢上殆んど抑制力なかるべく、且つ海外炭の輸入増加も亦殆んど絶望なる等の諸現象に想到せんか、將來市價の下落は望み得べからざるが如し。

以上は主として積極的供給方面のみの觀察に止まれりと雖も、翻て消極的供給方面に就て觀察する所あらん。何をか消極的供給と云ふ乎、曰く石炭節約法の増加發展に因りて、恰かも石炭の増加ありたるが如きの方法之れなり。即ち石炭以外の代用物に據りて石炭の使用を節約するものにして、此の方法としては主として水力電氣の使用を増加せしむるにありと雖も、一面水力電氣の擴張設備は、其の材料の暴騰及び不足等に因る設備費の増大を避け難く、而して斯の如き設備は一時應急の必要上に出づると雖も、戦後相當期間まで永續すべきものなるを以て、戦時價格に據る割高の設備費は、平和克復後に於て斯業經營上に累を及ぼすの恐あり、斯業家は勢ひ其の擴張に對して躊躇すべきの形勢あるが故に、此の如き消極的炭供給方法も亦理想の如く實現すべくもあらず。假令實現するとしても、最近に於ける水力電氣力使用は、逐年増加の趨勢あるの下に於て今次の如き炭價暴騰を來たせるに想到せば、炭價昂騰防遏上大なる効果を奏せざるに似たり。今試に名古屋市に於ける電力使用の趨勢を表示すれば左の如し。

用途別數	明治四十四年	明治四十五年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年
電力	一、三三三・五五	一、五三三・五五	六、六〇〇・五五	八、五三三・五五	九、三三三・五五	二二、三三三・五五	二四、〇〇〇・五五
電氣	一、三三三・五五	一、五三三・五五	六、六〇〇・五五	八、五三三・五五	九、三三三・五五	二二、三三三・五五	二四、〇〇〇・五五

即ち名古屋市に於ける電力は其の用途別に於ても、亦使用量に於ても逐年増加發展し、就中大正五年以降は實に顯著なる成績を示せし所以のものは、素より他にも諸種の原因あらんも、主として炭價暴騰の結果と觀るを得べし。此く電力使用の増加發展あるに關せず、名古屋市に於ける炭價は格別之が爲に影響されたるの著しきものあるを認むる能はず。更に大正四年に於て伊勢灣圈内に於ける電力の石炭に及ぼせし影響の一斑を示さん、同年に於ける使用電力を石炭に換算せば、概算上七萬二千噸を算するを以て、即ち此の量丈け石炭を節約せしに相當せり。又最近一ヶ年に於て從來石炭使用者の電力に變じたるもの、石炭數量は實に二萬九千六百噸に達し、新に水力電氣力使用者の使用電力を石炭に換算せば、九千噸に達すべく、此の他近き將來に於て水力電氣力の侵入せんとする餘地に對する石炭換算高は實に八萬噸に達すべき計算なり。

名古屋市に於ける此の如き狀況よりしても、全國に於ける電力の石炭に及ぼす影響は之を察知し得るに難からざるべし。而して間接的とは云へ斯の如く逐年消極的供給増加の行はれつゝあるにも關せず、炭價の暴騰今日の如くなるを思はゞ、消極的増炭計畫の炭價に及ぼす影響も亦之を察知するに難からざるべし。

### 第三項 運賃上よりの觀察

更に進んで將來に於ける運賃騰落の趨勢を觀察するに、之れ亦現戦亂との關係頗る密接なるものありて、現下の如き暴騰せる運賃は、現戦亂繼續中は船腹或は貨車の需給調節あらざる限りは、大勢上下落せざるべく、而して現今の状態に於ては新船の築造に因る船腹の補充は、世界造船業の大勢より觀察するも、一方敵艦の爲に撃沈さるゝ商船を補充し、更に出貨激増に因る需要の増進と伴はしむることは、殆んど不可能なるが如きを以て、依然船腹不足の泣聲は絶へざるべし。又貨車増發に就ては船腹補充とは其の輕重元より同一の論にあらずと雖も、之れ亦戦時状態の現下にありては、其の實施素より容易

ならざるものあり。況んや平和克復後に於ても、相當期間内に於ける世界の海運界は、戰前状態に恢復する能はざるの事情あるに於ておや。以上の考察にして幸に大過なくんば、運賃下落に因る炭價の下落は、目前之を實現する能はざるが如し。

#### 第四項 結論

以上三項に於て叙説せるが如く、今後に於ける石炭需要が依然として現勢を保ち、内地製造工業の使用舊に據りて増進し、海外輸出亦減退する能はざるに反し、他面供給に於ては内地産出高の増加は勿論、需要の節約に因る供給増加も亦意の如くなる能はざるのみならず、海外輸入の増進も亦到底之を實現し難く、且つ船車不足に因る運賃の昂騰を防止する能はざるとせんか、今後に於ける炭價は勢ひ下落する能はざるべし。然れども唯茲に一の考慮を要すべきは、假令現戰亂の終熄容易に望むべからずとし、隨て海外に於ける本邦商品の市場に何等の異状なく、内地製造工業不況に陥らざるとするも、海外若くば内地市場に於ける我が商品市價を現今以上に騰貴する能はざるに至らんか、如何に旺盛なる現況にあるとは云へ、現在に於てすら既に炭價昂騰に苦しみつゝめる我が製造工業は、此の上更に炭價の昂騰するに至らば、早晩之に堪へ能はざる飽和點に到達し、斯の如き昂騰せる炭價を以てしては、必ずや製造經營上の困難を訴へ、勢ひ製造の休止、或は然らざるも他の代用物、例へば水力電氣に赴くこと一層旺盛に至るべし。而して炭價にして斯の如き程度に昂騰し、且つ其の昂騰が一時的現象ならざるに於ては、現下新設又は擴張を困難とせる水力電氣も、四圍の事情に促がされて發展するに至ること、必ずしも架空の推論にあらざるべきを以て、一旦此の如き状態に到達せんか、勢ひ需要の減退を來たし、最早炭價の昂騰を見る能はざるに至るべし。加之現時に於ける供給不足より、各炭坑に於て試みつゝある出炭増加設備が幸に奏効して、早晩少なくとも今後の需要増進に伴はしむべき出炭の増加ありとせば、一層炭價の昂騰を抑制すべく、況んや一時災厄の爲に不活發なりし撫順炭坑其他よりの供給増加あるの曉に於てをや。要之、斯の如き異常の状態出現せず、又船車の調節に因る運賃の下落なきに於ては、今後に於ける石炭市價は、大勢上低落せざるものと見るも大過なからんか。

#### 第一節 市價昂騰抑制策

石炭市價昂騰の趨勢を抑制せんとするの途は、上來叙説せし昂騰に對する原因を一掃するにあり。即ち需要増進に伴はしむべく、出炭の増加及び海外輸入の促進に據る供給の増加を圖り、若くば他面節約に據る需要の減少を試み、更に進んで船車調節に因る運賃の昂騰を防止するにありと雖も、斯の如きは現狀を以てしては、所謂百年河清を待つと等しきの感なくんばならず。假に一步を譲り、此の如き憂なしとするも、叙上の實現には相當の日子を要し、現下の要求に應ずる能はざるに

似たるを以て、焦眉の應急策としては須らく他の方策を撰ばざるべからず。由來斯の如き方策は各人其の説を異にすべしと雖も、吾人を以て之を觀れば蓋し二あり。一は海外輸出の禁止にして、他は外國に對する船舶の賣却又は貸與に對し相當の制限を加へ、兼ねて盛に新船の建造を奨励するにあり。

最近本邦炭の海外輸出は内地産出高に對し一割四分以上を占め、需要増進に對する供給不足も亦大略同率なるを以て、海外輸出を禁止せんか茲に需給の調節を得るに至り、少なくとも炭價昂騰の勢を減殺するに至るべし。然るに論者或は石炭の海外輸出は之を價額に見積れば實に貳千萬圓以上に達し、大に我が輸出貿易を助長し、國富を來たしつゝあるを以て、國家經濟の大局より打算せんか、輸出禁止の非なることは論を俟たずして明かなりと。之れ蓋し一面の理なきにあらずと雖も、而かも其の全面を掩はざるの感なくんばならず。何となれば輸出貿易を助長し國富を増加しつゝあるは、國家經濟上喜ぶべきの現象なることは論者の如しと雖も、而かも斯の如きは平時經濟狀態の常規を保つの場合に應用さるべきものにして、今日の如く戰時經濟の變調を來たせるの際に於て執るべきの策にあらず。今日内に振興發展せる製造工業は、實に石炭を以て唯一の生命となし、其の需要の増進は遙に供給を超過しつゝあるを以て、市價爲に暴騰し、延いては以て廉價に製造し得る製產品の價格を昂騰せしめ、尠少ならざる損失を當業者は勿論一般國民に與へつゝあるを以て、一面輸出貿易を助成し、國富を増加せしめつゝあるとしても、他面之が爲に前記の如き損失を來たしつゝあるに於ては、結局何等國富を増加せしむるに至らず、内に於ては却て製造工業に甚大なる打撃を與へ、外に在つては徒に他國の製造工業を利し、間接には本邦輸出貿易を阻害すべきを以て、其の害や決して其の利を償ふに足らず。況んや輸出禁止を試みんか、之が爲め多少にても船腹の調節となり、一般運賃の昂騰を幾分にも防止するに至るべきを以て、所謂一舉兩得の利益あるに於てをや。

次に現下炭價の暴騰せる一大主因は、實に運賃の暴騰にあること既説の如くなるを以て、運賃の低落を圖れば、炭價昂騰の趨勢は自然に減殺され、以て炭界の現勢を變轉せしむるに與つて顯著なる作用を爲すべしと雖も、由來現戰亂の好影響に因る出貨激増及び一方敵艦の爲めに撃沈さるゝ商船の減少は、益々船腹の不足を來たさしめ、能く新船の之を補充する能はざるは、唯に本邦のみならず、實に世界に於ける大勢なるを以て、新船建造にのみ據る船腹の増加、所謂積極的運賃引下策は、叙上の如く現下直に之を實現すべからざるの事情あるが故に、現下の應急策としては消極的ながらも、從來の舊船たると方に建造せんとする新船たるを問はず、本邦船を外國に賣却し又は之を貸與するを制限し、以て内國航路に於ける船腹の減少を防止し、運賃を昂騰せしめざるに止まらず、進んで之を低落せしむるの策を講せんか、一面石炭の海外輸出と相待つて、炭價昂騰の大勢を抑制するに至るや、蓋し疑を容れざるべし。實に現戰亂の世界海運界に及ばせし影響は異數なるものあり、隨つて世界に於ける船腹の不足は之れ亦顯著なるを以て、海外海運業者は機に乗じ折に觸れ、盛に本邦主に向船



つて其の所有船の賣却又は貸與を交渉し來り、本邦船主亦其の有利に眩惑して之に應じつゝあるは、掩ふべからざるの事實に屬するを以て、彼等個人の利益の爲に多數製造業者、進んでは國家經濟に累を及ぼすが如きは、國家的觀念を以てしては寸時も認容すべからざることに屬す。故を以て少なくとも此の如き弊を一掃して、多少にても内國航路の船腹の減少を防止し、斯くして運賃の昂騰を未前に抑止するは、現下に於ける炭價暴騰の抑制策上焦眉の急にして、之と同時に一方盛に新船の建造を奨励して、今後に於ける船腹増加策を併用するに至らば、炭價暴騰の抑制上多大なる効果なくんばあらず。

石炭の海外輸出の禁止と云ひ、本邦船の海外賣却又は貸與の制限と云ひ、共に官憲の力に據り、政府の施設に待つにあらざれば之が實現を見る能はざるを以て、吾人は政府當局に向つて叙上兩策の急施を絶叫するものにして、政府と雖も之を現下に於ける本邦炭界の實狀に觀、進んで海外諸國に於ける炭界に對する政策に鑑みんか、吾人の切實なる要求を容るゝに吝ならざるを信するものなり。

以上二大應急策の外尙一の方策として觀るべきは、陸海軍工廠に於ける動力用石炭の使用を廢して、水力電氣を代用するにあり。陸海軍工廠に於ける動力用石炭の使用量は實に巨大なるを以て、之を廢して水力電氣を使用するに至らんか、大に石炭の節約となり間接的出炭の増加となるべきを以て、由來國家經濟上に立脚する此種政府事業に於ては、須らく炭界今日の現狀及び將來に鑑み、又民間製造工業の旺盛なる現狀の維持上に考ふるも、多少の不利、大小の困難を排しても、速に之が實施あらんことを切望せざるを得ず。

其他出炭増加及び民間に於ける一般石炭節約計畫即ち水力電氣の振興、或は輸送力の増大乃至は積極的船腹の調節に據る運賃低落策等の如きは、前既に論じたるが如く、現狀を以てしては頗る困難にして、現下直に其の實現を見るべきにあらずと雖も、其の之れあるの故を以て、徒に袖手傍觀するが如きは、時局に處する所以の道にあらざるが故に、所謂人事を盡くして而して後天命を待つ努力あらば、少なくとも大勢の抑制上幾分の効果なしとせざると同時に、政府に於ても亦單に叙上の施設を試むるのみに止まらず、相當炭價抑制上の劃策を實施し、以て今日炭價暴騰の爲に苦しみつゝある一般商工業者を救済すべきは、之を開戦後炭價の昂騰あるに至るや、直に其の抑制策を試みし英國に於ける實例に徴するも、正に執るべきの策なりと云はざるべからず。

(大正六年五月六月調査)

石炭に關する調査終

大正六年九月二十二日印刷  
大正六年九月二十六日發行

編輯者 犬伏節輔  
名古屋市東區西二葉町十八番地

印刷者 山田良弼  
名古屋市西區伊倉町二丁目二十番地

印刷所 一誠社  
名古屋市西區伊倉町二丁目二十番地

發行所 名古屋市中區榮町七丁目  
名古屋商業會議所

終